

第3章 小学部

I 結果と考察

1. 教員に関する内容

1) 単純回答

①教員歴

教員歴の平均は 17.5 年（範囲：0 年～39 年、中央値 16 年、標準偏差 11.3 年）であった（表 3-1）。なお、無回答が 19 名いた。

表 3-1 回答者の年齢構成（人）						
年齢	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	計
人数	85	87	129	105	37	443

②指導歴

聴覚障害児に対する指導歴の平均は 12 年（範囲：0 年～39 年、中央値 16 年、標準偏差 9.8 年）であった。その内訳をみると、特別支援学校（聴覚障害）での指導歴の平均が 11.1 年（範囲：0 年～39 年、中央値 8 年、標準偏差 9.7 年）であり、特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導歴の平均が 4.1 年（範囲：0 年～36 年、中央値 0 年、標準偏差 6.1 年）、難聴学級ないし通級指導教室での指導歴の平均が 0.5 年（範囲：0 年～16 年、中央値 0 年、標準偏差 2.1 年）、通常学級での指導歴の平均が 1.2 年（範囲：0 年～21 年、中央値 0 年、標準偏差 3.3 年）であった（表 3-2）。

表 3-2 回答者の学校での指導歴（人）									
年齢段階	5 年 以下	6～ 10 年	11～ 15 年	16～ 20 年	21～ 25 年	26～ 30 年	31 年 以上	計	平均年 数（年）
教員歴	78	74	56	77	24	59	74	442	17.5
聴覚障害児に対する指導歴	159	84	42	77	20	22	36	440	12.0
特別支援学校（聴覚障害）での指導歴	172	89	46	65	18	18	34	442	11.1
特別支援学校（聴覚障害以外）での指導歴	319	37	40	19	10	0	1	426	4.1
難聴学級ないし通級指導教室での指導歴	423	2	2	1	5	0	0	433	0.5
通常学級での指導歴	402	5	5	9	1	0	0	422	1.2

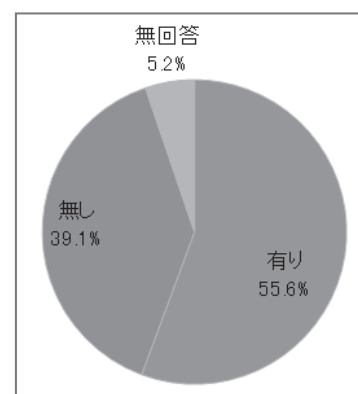
③担当児童数

担当する児童数の平均は 5.6 人（標準偏差 8.1 人）であった。そのうち、人工内耳を装用している児童数は 2.8 人（標準偏差 3.1 人）であった。

④医療機関との連携の有無

人工内耳装用児童に関する医療機関との連携については、連携が有ると答えた者が 462 名中 266 名（55.6%）、連携を行っていないと答えた者が 462 名中 187 名（39.1%）であった（図 3-1）。

図 3-1 医療機関との連携



2) 記述式

①医療機関との連携の内容

医療機関との連携を行っているとした回答の内訳は、「保護者を通じての情報共有」が 153 件 (58.6%)、次いで、「情報交換会の開催」が 91 件 (34.9%) であった。その他に、「通院に教員が同行する、保護者向け研修会に参加する」が 29 件 (11.1%)、「ST や医師の来校」が 20 件 (7.7%)、「その他」が 8 件 (3.1%) であった。なお、「その他」については、重複する障害に関する事項あるいは医療的ケアに関する事項などであった。

②指導上の課題

補聴器装用児と比較した際に、人工内耳装用児に対する指導上で課題として感じている事項については、392 件の回答が得られた。その内訳は、「コミュニケーション」に関する回答が最も多く (101 件)、次いで「言語力」(73 件)、「聴覚活用」(41 件)、「障害理解」(36 件)、「発音・発語」(25 件)、「教科学習」(24 件)、「その他」(88 件) であった。

指導上困難な事柄として、「コミュニケーション」が挙げられているが、これは、「聴覚活用」が可能となつてくれば話者の顔 (口元) を見ようとしなくなるなど、傾聴態度が育っていないとの回答が目立ち、これまでのろう教育において培ってきた基本が身につかない事例が多くあるようである。

③指導上の工夫点

人工内耳装用児に対して指導を行う際に工夫している点については、「コミュニケーション」に関する回答が最も多く (97 件)、次いで「聴覚活用」(62 件)、「言語力」(58 件)、「発音・発語指導」(40 件)、「教科学習」(13 件)、「障害理解」(8 件)、「その他」(21 件) であった。

「コミュニケーション」に関する項目が最も多くみられたが、これは、指導上の課題で挙げられていた内容と同様に、人工内耳装用児自身が自身の聞こえについて十分な理解が無く、話者の顔 (口元) を見ようとしなくなるなど、傾聴態度が育っていないために重点的に指導を行っていると考えられる。

④補聴器装用児との指導上の違い

補聴器装用児と比較した際に、人工内耳装用児に対して指導しやすい点については、365 件の回答が得られた。その内訳は、「聴覚活用」が 211 件と最も多く、次いで「コミュニケーション」(56 件)、「発音・発語指導」(36 件)、「言語力」(34 件)、「教科学習」(16 件)、「障害理解」(0 件)、「その他」(7 件) の順であった。

指導しやすい点については、かなりの割合で「聴覚活用」が可能であると答えているため、そのうえで、「コミュニケーションが円滑である」あるいは「発音・発語指導」、「言語指導」、「教科学習」が指導しやすいとの回答であった。

⑤学習したい研修内容

学習したい研修内容については、348 件の回答があった。そのうち、「人工内耳に関する基礎的な研修」が 197 件 (56.6%)、「人工内耳装用児に対する指導・支援に関する内容」が 98 件 (28.1%)、「人工内耳装用児の発達に関する内容」が 30 件 (8.6%)、「その他」の内容についての回答が 55

件（15.8％）あった。

「人工内耳に関する基礎的な研修」については、聴覚の解剖生理学や人工内耳の仕組みそのものについて、さらには日々の使用にあたっての留意点等が挙げられた。次に、「人工内耳装用児への指導・支援」については、聴覚活用の方法、発音指導、言語指導、教科指導などが挙げられた。また、「人工内耳装用児の発達に関する内容」については、人工内耳装用児の認知発達や言語発達の特徴について挙げられた。最後に、「その他」については、人工内耳に係る福祉的な配慮、手続きについて、人工内耳装用者の就労、人工内耳装用者の体験談などが挙げられた。

2. 幼児児童生徒に関する内容

1) 単純回答と記述式

①学年

回答のあった児童の人数は 462 名（1 年生 96 名、2 年生 74 名、3 年生 67 名、4 年生 80 名、5 年生 73 名、6 年生 72 名）であった。

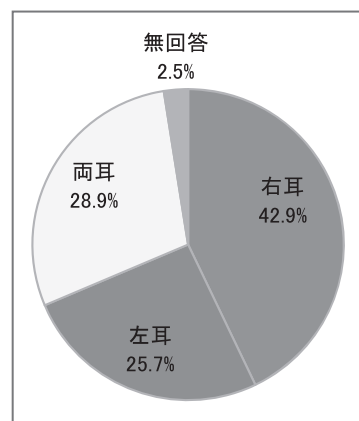
②診断時年齢

聴覚障害診断時の年齢については、1 歳未満が 189 名（39.5％）、1 歳代が 60 名（12.6％）、2 歳代が 52 名（10.9％）、3 歳代が 21 名（4.4％）、4 歳代が 1 名（0.2％）、5 歳～9 歳代で 4 名（0.8％）であり、10 歳以上で診断を受けた児童はいなかった。なお、無回答は 151 名（31.6％）であった。

③人工内耳装用状態

人工内耳装用状況については、両耳装用児が 138 名（28.9％）であり、右耳装用児が 205 名（42.9％）、左耳装用児 123 名（25.7％）であった（図 3-2）。このうち、片耳装用児については、人工内耳を装用しない耳に補聴機器を使用している児童が 275 名（57.5％）、補聴機器を使用していない児童が 72 名（15.1％）であった。

図 3-2 人工内耳装用状況



④人工内耳装用開始時期

人工内耳装用開始時期については、1 歳未満が 7 名（1.5％）、1 歳代が 78 名（16.3％）、2 歳代が 125 名（26.2％）、3 歳代が 82 名（17.2％）、4 歳代が 51 名（10.7％）、5 歳～9 歳代が 42 名（8.8％）、10 歳以上が 2 名（0.4％）であった。なお、無回答は 91 名（19.0％）であった。

⑤手術前の平均聴力レベル

人工内耳装用以前の裸耳平均聴力レベルの平均は、右耳では 103.5dB（標準偏差 12.2dB）であり、左耳では 103.7dB（標準偏差 14.5dB）であった。

⑥現在の平均聴力レベル

担当する児童の現在の補聴器等装用閾値の平均は、右耳で 35.7dB（標準偏差 19.7dB）、左耳で 42.0dB（標準偏差 22.1dB）であった。

なお、人工内耳を装用していない耳に補聴機器を使用していない児童が 86 名おり、その補聴機器を使用していない方の耳の平均聴力レベルの平均は 106.8dB（標準偏差 17.4dB）であった。

⑦重複障害の種類

担当する児童の重複障害の有無については、重複障害のない児童が 344 名（72.0%）、重複障害のある児童が 118 名（24.7%）であった（図 3-3）。

このうち、重複障害のある児童についてみると、知的障害との重複の児童が 89 名（75.4%）、肢体不自由との重複の児童が 7 名（5.9%）、視覚障害との重複の児童が 6 名（5.1%）、病弱・身体虚弱との重複の児童が 5 名（4.2%）、その他の障害との重複の児童が 11 名（26.3%）であった。その他の障害については、発達障害が 18 名の他、症候群性の難聴に起因するものが挙げられた。

⑧普段使用しているコミュニケーションモード

普段使用しているコミュニケーションモードについて、複数回答可の形式で求めたところ、重複なしの児童の場合、音声 が 325 名（94.5%）、手話が 280 名（81.4%）、指文字が 247 名（71.8%）、読話が 110 名（32.0%）、キューサインが 38 名（11.0%）、筆談が 29 名（8.4%）、その他が 36 名（10.5%）であった。一方、重複ありの児童の場合、手話が 108 名（91.5%）、音声 が 92 名（78.0%）、指文字が 85 名（72.0%）、読話が 13 名（11.0%）、筆談が 13 名（11.0%）、キューサインが 8 名（6.8%）、その他が 24 名（20.3%）であった。

次に、学校での学習時に最も多く用いるコミュニケーションモードについては、重複なしの児童の場合、音声 が 250 名（72.7%）、手話が 72 名（20.9%）、キューサインが 10 名（2.9%）、指文字が 9 名（2.6%）、読話が 1 名（0.3%）、筆談が 0 名、その他が 0 名であった（図 3-4）。

一方、重複ありの児童の場合、音声 が 57 名（48.3%）、手話が 47 名（39.8%）、指文字が 3 名（2.5%）、キューサインが 3 名（2.5%）、読話が 0 名、筆談が 0 名、その他が 8 名（6.8%）であった（図 3-5）。

また、学校の学習時に 2 番目に多く用いるコミュニケーションモードについては、重複なしの児童の場合、手話が 169 名（49.1%）、音声 が 54 名（15.7%）、指文字が 49 名（14.2%）、キューサインが 20 名（5.8%）、読話が 23 名（6.7%）、筆談が 5 名（1.5%）、その他が 18 名（5.2%）であった。

一方、重複ありの児童の場合、手話が 55 名（46.6%）、音声 が 26 名（22.0%）、指文字が 28 名（23.7%）、キューサインが 3 名（2.5%）、読話が 1 名（0.8%）、筆談が 0 名、その他が 4 名（3.4%）であった。

図 3-3 重複する障害の有無

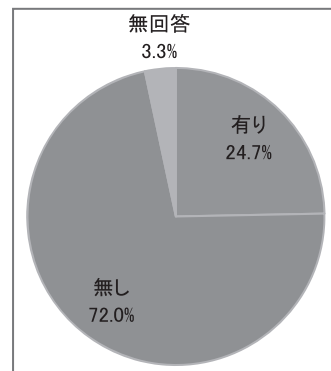


図 3-4 学習時に用いる主たるコミュニケーションモード（重複なし）

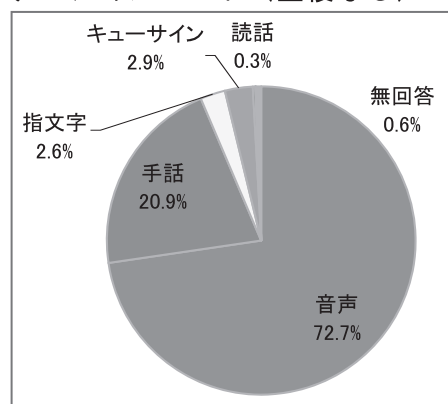
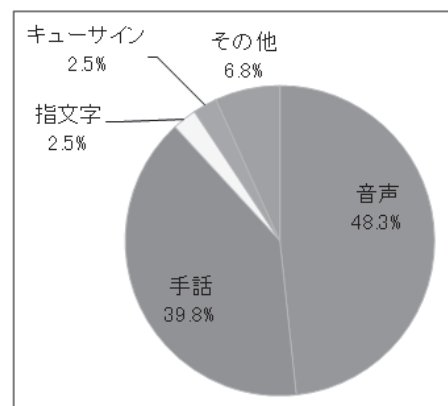


図 3-5 学習時に用いる主たるコミュニケーションモード（重複あり）



⑨家族構成（きょうだい・近親者）

聴覚障害児の家族構成等については、重複なしの児童の場合、きょうだい児がいる児童は 276 名（80.2%）、きょうだい児がいない児童が 60 名（17.4%）であった。一方、重複ありの児童の場合、きょうだい児がいる児童は 84 名（71.2%）、きょうだい児がいない児童が 29 名（24.6%）であった。

次に、近親者の聴覚障害者の有無については、重複なしの児童の場合、近親者に聴覚障害者のいる児童が 60 名（17.4%）、近親者に聴覚障害者のいない児童が 265 名（77.0%）であった。一方、重複ありの児童の場合、近親者に聴覚障害者のいる児童が 13 名（11.0%）、近親者に聴覚障害者のいない児童が 97 名（82.2%）であった。

⑩学校歴（現在まで）

これまでの学校歴については、乳児期、幼児期の 2 期に分けて示す。

まず、乳児期については、重複なしの児童の場合、特別支援学校（聴覚障害）に通っていた児童が 198 名（57.6%）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が 60 名（17.4%）、その他の施設に通っていた児童が 49 名（14.2%）であった（図 3-6）。一方、重複ありの児童の場合、特別支援学校（聴覚障害）に通っていた児童が 61 名（51.7%）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が 27 名（22.9%）、その他の施設に通っていた児童が 17 名（14.4%）であった（図 3-7）。

次に、幼児期については、重複なしの児童の場合、特別支援学校（聴覚障害）幼稚園に通っていた児童が 299 名（86.9%）、幼稚園に通っていた児童が 32 名（9.3%）、保育所に通っていた児童が 25 名（7.3%）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が 26 名（7.6%）、その他の施設に通っていた児童が 10 名（2.9%）であった（図 3-6）。一方、重複ありの児童の場合、特別支援学校（聴覚障害）幼稚園に通っていた児童が 96 名（81.4%）、幼稚園に通っていた児童が 5 名（4.2%）、保育所に通っていた児童が 12 名（10.2%）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が 12 名（10.2%）、その他の施設に通っていた児童が 11 名（9.3%）であった（図 3-7）。

図 3-6 学校歴（重複なし児）

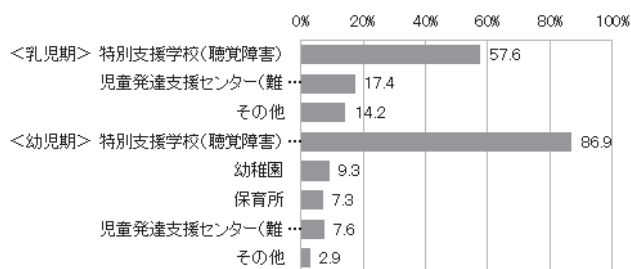
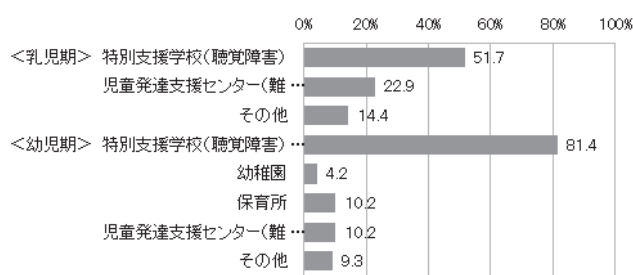


図 3-7 学校歴（重複あり児）



⑪今後の進路

聴覚障害児の進路希望については、中学校段階、高等学校段階、大学、就職・その他の4つの段階に分けて示す。なお、高等学校段階以降については、無回答の割合が6割～8割と高いため、重複なしの児童、重複ありの児童の結果を合わせて示す。

まず、聴覚障害児の中学校段階での進路希望については、重複なしの児童の場合、特別支援学校（聴覚障害）中学部に進学希望の児童が234名（68.0%）、中学校（通常学級）に進学希望の児童が17名（4.9%）、中学校（特別支援学級）に進学希望の児童が5名（1.5%）、その他の進学希望の児童が15名（4.4%）であった。一方、重複ありの児童の場合、特別支援学校（聴覚障害）中学部に進学希望の児童が80名（67.8%）、中学校（通常学級）に進学希望の児童が0名、中学校（特別支援学級）に進学希望の児童が0名、その他の進学希望の児童が9名（7.6%）であった。

次に、高等学校段階の進路希望については、特別支援学校（聴覚障害）高等部に進学希望の児童が164名（34.3%）、高等学校に進学希望の児童が22名（4.6%）、その他の進学希望の児童が31名（6.5%）であった。

また、大学等の進学希望については、特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科に進学希望の児童が14名（2.9%）、高等専門学校に進学希望の児童が0名、筑波技術大学に進学希望の児童が7名（1.5%）、一般大学に進学希望の児童が20名（4.2%）、その他の進学希望の児童が54名（11.3%）であった。

⑫聴覚活用の状態（表3-3、表3-4）

・音への気づき

音への気づきが『極めて良い』から『良くない』までの5段階で評価すると、重複なしの児童の場合、『極めて良い』児童は119名（34.6%）、『良い』児童は169名（49.1%）、『どちらともいえない』児童は30名（8.7%）、『あまり良くない』児童は15名（4.4%）、『良くない』児童は10名（2.9%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『極めて良い』児童は22名（18.6%）、『良い』児童は63名（53.4%）、『どちらともいえない』児童は19名（16.1%）、『あまり良くない』児童は6名（5.1%）、『良くない』児童は6名（5.1%）であった。

・言語音の聞き取り

言語音の聞き取りについても、音への気づきと同様の5段階で評価すると、重複なしの児童の場合、『極めて良い』児童は49名（14.2%）、『良い』児童は166名（48.3%）、『どちらともいえない』児童は69名（20.1%）、『あまり良くない』児童は40名（11.6%）、『良くない』児童は19名（5.5%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『極めて良い』児童は5名（4.2%）、『良い』児童は46名（39.0%）、『どちらともいえない』児童は35名（29.7%）、『あまり良くない』児童は13名（11.0%）、『良くない』児童は16名（13.6%）であった。

・傾聴態度

傾聴態度について、『よくできている』から『できていない』までの5段階で評価すると、重複なしの児童の場合、『よくできている』児童は66名（19.2%）、『できている』児童は141名

(41.0%)、『どちらともいえない』児童は 81 名 (23.5%)、『あまりできていない』児童は 46 名 (13.4%)、『できていない』児童は 8 名 (2.3%) であった。

一方、重複ありの児童の場合、『よくできている』児童は 4 名 (3.4%)、『できている』児童は 29 名 (24.6%)、『どちらともいえない』児童は 38 名 (32.2%)、『あまりできていない』児童は 34 名 (28.8%)、『できていない』児童は 11 名 (9.3%) であった。

表 3-3 聴覚活用の状態（重複なし児；％）					
	極めて良い	良い	どちらともいえない	あまり良くない	良くない
音への気づき	34.6	49.1	8.7	4.4	2.9
言語音の聞き取り	14.2	48.3	20.1	11.6	5.5
傾聴態度	19.2	41.0	23.5	13.4	2.3

表 3-4 聴覚活用の状態（重複あり児；％）					
	極めて良い	良い	どちらともいえない	あまり良くない	良くない
音への気づき	18.6	53.4	16.1	5.1	5.1
言語音の聞き取り	4.2	39.0	29.7	11.0	13.6
傾聴態度	3.4	24.6	32.2	28.8	9.3

（聴覚活用に関する現状と課題）

聴覚活用に関する現状と課題について、402 件の回答があったが、「重複なし」の児童に関する回答が 304 件、「重複あり」の児童に関する回答が 98 件であった。

重複なしの児童に関する回答のうち、「活用できている」が 190 件、「活用できていない」が 21 件であった。このうち、聴覚活用が十分にできている児童の指導上の課題については、「ことばや文での聞き取りの困難」が 64 件、「傾聴態度」が 40 件、「年齢相応の語彙力、文法力の育成」が 24 件、「障害理解」が 12 件、「課題遂行時の集中力」が 11 件、「その他」が 26 件であった。

一方、重複ありの児童に関する回答のうち、「活用できている」が 63 件、「活用できていない」が 7 件であった。指導上の課題には、重複障害に起因した内容が多く、個別性も高いため、分類が困難であるが、「傾聴態度の育成不十分」、「集中持続の困難」などのキーワードが挙げられた。

人工内耳を装用したことで生活音等の小さな音に対する気づきは増えており、非言語音や呼びかけの声などが聞こえているにも関わらず、教師の発する単語や文を理解する能力に課題が残るようである。さらに、単語や文の理解ができないために、年齢相応の言語力も身につけることができないまま、障害理解も不十分で傾聴態度の育成もできていない様子が見られた。

⑬言語活動（表 3-5、表 3-6）

言語活動について、以下の 4 つの項目について、『高い』から『低い』までの 5 段階で評価を行った。

・文法力

文法力については、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 14 名 (4.1%)、『や

や高い』と評価された児童が 24 名 (7.0%)、『同じくらい』と評価された児童が 54 名 (15.7%)、『やや低い』と評価された児童が 110 名 (32.0%)、『低い』と評価された児童が 140 名 (40.7%)であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 1 名 (0.8%)、『やや高い』と評価された児童が 0 名、『同じくらい』と評価された児童が 5 名 (4.2%)、『やや低い』と評価された児童が 21 名 (17.8%)、『低い』と評価された児童が 83 名 (70.3%)であった。

・文章理解力

文章理解力については、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 17 名 (4.9%)、『やや高い』と評価された児童が 25 名 (7.3%)、『同じくらい』と評価された児童が 67 名 (19.5%)、『やや低い』と評価された児童が 97 名 (28.2%)、『低い』と評価された児童が 136 名 (39.5%)であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 1 名 (0.8%)、『やや高い』と評価された児童が 0 名、『同じくらい』と評価された児童が 6 名 (5.1%)、『やや低い』と評価された児童が 18 名 (15.3%)、『低い』と評価された児童が 85 名 (72.0%)であった。

・作文力

作文力については、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 13 名 (3.8%)、『やや高い』と評価された児童が 14 名 (4.1%)、『同じくらい』と評価された児童が 62 名 (18.0%)、『やや低い』と評価された児童が 112 名 (32.6%)、『低い』と評価された児童が 142 名 (41.3%)であった。重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 1 名 (0.8%)、『やや高い』と評価された児童が 0 名、『同じくらい』と評価された児童が 4 名 (3.4%)、『やや低い』と評価された児童が 15 名 (12.7%)、『低い』と評価された児童が 91 名 (77.1%)であった。

・文章構成力

文章構成力については、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 8 名 (2.3%)、『やや高い』と評価された児童が 18 名 (5.2%)、『同じくらい』と評価された児童が 53 名 (15.4%)、『やや低い』と評価された児童が 110 名 (32.0%)、『低い』と評価された児童が 153 名 (44.5%)であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 1 名 (0.8%)、『やや高い』と評価された児童が 0 名、『同じくらい』と評価された児童が 3 名 (2.5%)、『やや低い』と評価された児童が 12 名 (10.2%)、『低い』と評価された児童が 95 名 (80.5%)であった。

表 3-5 言語活動の状態（重複なし児；％）

	高い	やや高い	同じくらい	やや低い	低い
文法力	4.1	7.0	15.7	32.0	40.7
文章理解力	4.9	7.3	19.5	28.2	39.5
作文力	3.8	4.1	18.0	32.6	41.3
文章構成力	2.3	5.2	15.4	32.0	44.5

表 3-6 言語活動の状態（重複あり児；％）					
	高い	やや高い	同じくらい	やや低い	低い
文法力	0.8	0.0	4.2	17.8	70.3
文章理解力	0.8	0.0	5.1	15.3	72.0
作文力	0.8	0.0	3.4	12.7	77.1
文章構成力	0.8	0.0	2.5	10.2	80.5

（言語活動の指導の現状）

言語活動に関する指導の現状と課題について、418 件の回答があったが、重複なしの児童に関する回答が 314 件、重複ありの児童に関する回答が 104 件であった。

重複なしの児童に関する回答のうち、指導上の課題として挙げられていた項目は「語彙」が 103 件と最も多く、次いで「文法」（79 件）、「話し言葉から書き言葉への移行」（24 件）、「音韻」（19 件）、「文理解」（17 件）、「言語活動に対する意欲」（12 件）、「その他」（47 件）であった。

一方、重複ありの児童に関する回答のうち、指導上の課題として挙げられていた項目は「語彙」（37 件）、「文字との結びつき」（20 件）、「文法」（15 件）、「その他」（10 件）であった。特に、「文字との結びつき」については、たとえば、小学部 3 年生の児童で「ようやく平仮名を覚え、漢字を学習している段階」といった回答や、小学部 6 年生の児童で「最近、ほとんどのひらがなを書くことができるようになった」などの回答があり、重複障害に起因する困難さの影響が考えられた。

聴覚活用ができていることで、聞こえそのものの課題は少なく、「語彙」や「文法」の能力を育成することに課題を感じている場合が多い。また、小学部の低学年段階の児童に関する内容では、書くことに抵抗があること、会話の内容をもとにまとめの一文を書くことに対する困難さなどが挙げられていた。さらに、「その他」には、話しことばの面で、会話のルールを身につけさせたい、書きことばの拡充として、読み手を意識した文作成ができるようにしたい、などが挙げられていた。

2) 学校での学習と生活

①学業成績

・健聴児と比べた学業成績の程度

同年齢の健聴児と比べた場合の学業成績について、『高い』から『低い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 16 名（4.7%）、『少し高い』と評価された児童が 27 名（7.8%）、『同じくらい』と評価された児童が 95 名（27.6%）、『少し低い』と評価された児童が 102 名（29.7%）、『低い』と評価された児童が 101 名（29.4%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 1 名（0.8%）、『少し高い』と評価された児童が 1 名（0.8%）、『同じくらい』と評価された児童が 4 名（3.4%）、『少し低い』と評価された児童が 21 名（17.8%）、『低い』と評価された児童が 80 名（67.8%）であった。

・潜在力と比べた学業成績の程度

聴覚障害児本人の潜在的な学習能力や知的能力に比べた場合の現在の学業成績について、『同じくらい』から『比較できないほど低い』までの5段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『同じくらい』と評価された児童が131名（38.1%）、『やや低い』と評価された児童が83名（24.1%）、『低い』と評価された児童が78名（22.7%）、『かなり低い』と評価された児童が38名（11.0%）、『比較できないほど低い』と評価された児童が8名（2.3%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『同じくらい』と評価された児童が34名（28.8%）、『やや低い』と評価された児童が19名（16.1%）、『低い』と評価された児童が20名（16.9%）、『かなり低い』と評価された児童が21名（17.8%）、『比較できないほど低い』と評価された児童が14名（11.9%）であった。

・読書力の程度

同年齢の健聴児と比べた場合の読書力について、『高い』から『低い』までの5段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が17名（4.9%）、『少し高い』と評価された児童が31名（9.0%）、『同じくらい』と評価された児童が56名（16.3%）、『少し低い』と評価された児童が95名（27.6%）、『低い』と評価された児童が142名（41.3%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が1名（0.8%）、『少し高い』と評価された児童が0名、『同じくらい』と評価された児童が1名（0.8%）、『少し低い』と評価された児童が22名（18.6%）、『低い』と評価された児童が82名（69.5%）であった。

・学業成績

学業成績に関する上記3項目において、同年齢の健聴児と比較して、おおむね良好である（10点以上）と評価された児童は113名（重複なしの児童109名、重複ありの児童4名）、課題がある（9点以下）と評価された児童は328名（重複なしの児童227名、重複ありの児童101名）であった（図3-8、図3-9）。このうち、重複なしの児童に関する回答が213件、重複ありの児童に関する回答が99件であった。

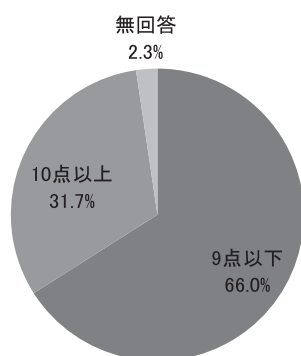


図3-8 学業成績全般の評価(重複なし児)

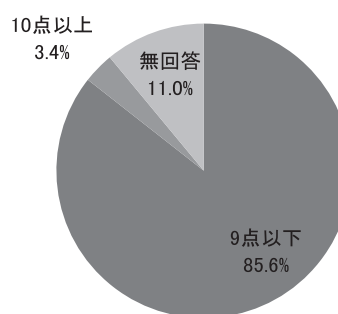


図3-9 学業成績全般の評価(重複あり児)

重複なしの児童に関する回答のうち、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、語彙力の低さに伴う学習上の困難、また、文法の力の弱さによって、国語の教科学習のみならず、算数の文章題理解や、理科や社会の教科書の読解困難などが挙げられた。

重複ありの児童に関する回答には、“知的障害と肢体不自由を重複するため、手話表現も難しい”、“ADHD の特性による集中の持続困難”などの意見が挙げられており、重複する障害に起因する困難もうかがわれた。

②学習態度

・注意散漫の程度

注意散漫の程度について、同年齢の平均的な健聴の児童と比較して『ほとんどない』から『多い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『ほとんどない』と評価された児童が 70 名 (20.3%)、『少しある』と評価された児童が 39 名 (11.3%)、『同じくらい』と評価された児童が 95 名 (27.6%)、『少し多い』と評価された児童が 91 名 (26.5%)、『多い』と評価された児童が 45 名 (13.1%) であった。一方、重複ありの児童の場合、『ほとんどない』と評価された児童が 2 名 (1.7%)、『少しある』と評価された児童が 14 名 (11.9%)、『同じくらい』と評価された児童が 14 名 (11.9%)、『少し多い』と評価された児童が 28 名 (23.7%)、『多い』と評価された児童が 52 名 (44.1%) であった。

・注意持続時間の程度

注意持続時間の程度について、同年齢の平均的な健聴の児童と比較して『長い』から『短い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『長い』と評価された児童が 38 名 (11.0%)、『少し長い』と評価された児童が 19 名 (5.5%)、『同じくらい』と評価された児童が 142 名 (41.3%)、『少し短い』と評価された児童が 96 名 (27.9%)、『短い』と評価された児童が 45 名 (13.1%) であった。一方、重複あり野児童の場合、『長い』と評価された児童が 0 名、『少し長い』と評価された児童が 0 名、『同じくらい』と評価された児童が 18 名 (15.3%)、『少し短い』と評価された児童が 42 名 (35.6%)、『短い』と評価された児童が 52 名 (44.1%) であった。

・口答による指示に対する反応

口頭による指示に対して戸惑いを示したり躊躇したりするかについて、『ない』から『多い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『ない』と評価された児童が 33 名 (9.6%)、『ほとんどない』と評価された児童が 67 名 (19.5%)、『時々ある (他の子と同じくらい)』と評価された児童が 137 名 (39.8%)、『やや多い』と評価された児童が 59 名 (17.2%)、『多い』と評価された児童が 46 名 (13.4%) であった。一方、重複ありの児童の場合、『ない』と評価された児童が 8 名 (6.8%)、『ほとんどない』と評価された児童が 5 名 (4.2%)、『時々ある (他の子と同じくらい)』と評価された児童が 31 名 (26.3%)、『やや多い』と評価された児童が 30 名 (25.4%)、『多い』と評価された児童が 40 名 (33.9%) であった。

・学習態度

学習態度に関する上記 3 項目において、同年齢の健聴児と比較して、おおむね良好である (9 点以上) と評価された児童は 211 名 (重複なしの児童 188 名、重複ありの児童 23 名)、課題があ

る（8 点以下）と評価された児童は 239 名（重複なしの児童 152 名、重複ありの児童 87 名）であった（図 3-10、図 3-11）。このうち重複なしの児童に関する回答が 140 件、重複ありの児童に関する回答が 84 件であった。

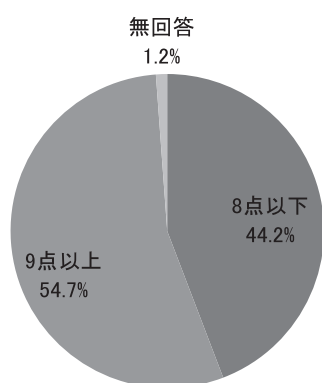


図 3-10 学習態度全般の評価（重複なし児）

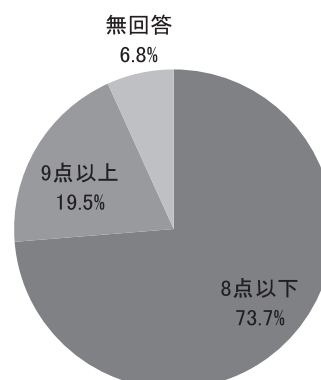


図 3-11 学習態度全般の評価（重複あり児）

重複なしの児童に関する回答のうち、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、年齢相応の言語力が養えていないために、言語的な指示の理解が困難で、視覚的な手掛かりに頼りがちであるとの意見が挙げられた。また、障害理解も浅く、聞こえにくさに関する意識が乏しく、傾聴態度も育っていないため、学習態度も十分とは言えない様子であった。

重複ありの児童に関する回答には、“知的障害と自閉症を併せ有することもあり、集中力は長く続かないが、好きな学習には離席せずに落ち着いて取り組んでいる”、“てんかん発作の薬の影響で集中することが難しい”などの意見が挙げられていた。このように重複する障害の影響もうかがわれるが、重複する障害種を問わず、全般的には集中力の続かなさという点が挙げられていた。

③コミュニケーション能力

・コミュニケーション能力の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、コミュニケーション能力の程度について、『高い』から『低い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 19 名（5.5%）、『やや高い』と評価された児童が 24 名（7.0%）、『同じくらい』と評価された児童が 132 名（38.4%）、『やや低い』と評価された児童が 104 名（30.2%）、『低い』と評価された児童が 60 名（17.4%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 0 名、『やや高い』と評価された児童が 2 名（1.7%）、『同じくらい』と評価された児童が 16 名（13.6%）、『やや低い』と評価された児童が 36 名（30.5%）、『低い』と評価された児童が 56 名（47.5%）であった。

・語彙力の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、語彙力の程度について、『高い』から『低い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 13 名（3.8%）、『やや高い』と評価された児童が 28 名（8.1%）、『同じくらい』と評価された児童が 60 名（17.4%）、

『やや低い』と評価された児童が 93 名（27.0%）、『低い』と評価された児童が 146 名（42.4%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 0 名、『やや高い』と評価された児童が 2 名（1.7%）、『同じくらい』と評価された児童が 4 名（3.4%）、『やや低い』と評価された児童が 27 名（22.9%）、『低い』と評価された児童が 78 名（66.1%）であった。

・話す能力の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、話す能力の程度について、『高い』から『低い』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『高い』と評価された児童が 11 名（3.2%）、『やや高い』と評価された児童が 37 名（10.8%）、『同じくらい』と評価された児童が 108 名（31.4%）、『やや低い』と評価された児童が 111 名（32.3%）、『低い』と評価された児童が 70 名（20.3%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『高い』と評価された児童が 0 名、『やや高い』と評価された児童が 2 名（1.7%）、『同じくらい』と評価された児童が 7 名（5.9%）、『やや低い』と評価された児童が 35 名（29.7%）、『低い』と評価された児童が 66 名（55.9%）であった。

・コミュニケーション能力

コミュニケーション能力に関する上記 3 項目において、同年齢の健聴児と比較して、おおむね良好である（11 点以上）と評価された児童は 42 名（重複なしの児童 41 名、重複ありの児童 1 名）、課題がある（10 点以下）と評価された児童は 404 名（重複なしの児童 295 名、重複ありの児童 109 名）であった（図 3-12、図 3-13）。このうち重複なしの児童に関する回答が 272 件、重複ありの児童に関する回答が 106 件であった。

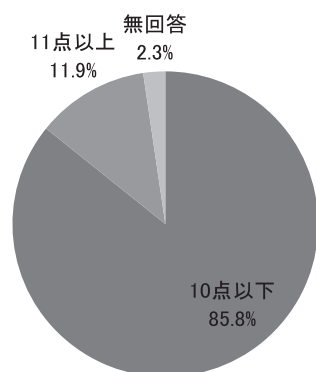


図 3-12 コミュニケーション能力全般の評価
（重複なし児）

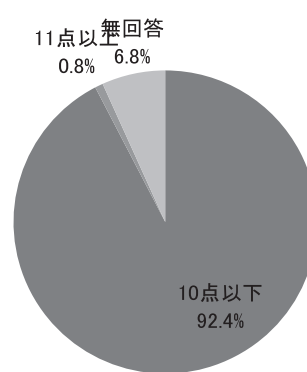


図 3-13 コミュニケーション能力全般の評価
（重複あり児）

重複なしの児童に関する回答のうち、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、語彙力の低さ、文法の弱さなどが挙げられた他、コミュニケーション意欲の低さ、聞き手にとってわかりやすい話し方が身につけていないなどが挙げられた。

重複ありの児童に関する回答には、“フレンドリーで友達との関係は良好。手話を使えない人と

のコミュニケーションに課題が多い”、“人と関わるのが好きで、積極的に話しかけているが、話が一方的になりやすい”などの意見が挙げられた。重複障害があっても、コミュニケーション意欲の高い児童がいることがうかがわれるが、年齢相応の適切な語彙の獲得ができていないこと、あるいは相手にとって理解しやすい話し方などに困難を持っていることが示唆された。

④学校生活

・学習への参加状況

教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況について、『多い』から『少ない』までの5段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『多い』と評価された児童が79名(23.0%)、『やや多い』と評価された児童が65名(18.9%)、『同じくらい』と評価された児童が91名(26.5%)、『やや少ない』と評価された児童が77名(22.4%)、『少ない』と評価された児童が27名(7.8%)であった。一方、重複ありの児童の場合、『多い』と評価された児童が13名(11.0%)、『やや多い』と評価された児童が9名(7.6%)、『同じくらい』と評価された児童が21名(17.8%)、『やや少ない』と評価された児童が31名(26.3%)、『少ない』と評価された児童が38名(32.2%)であった。

・家庭課題への対応状況

持ち物や宿題の持参程度あるいは提出状況について、『常に持参・提出』から『常に忘れる』までの5段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『常に持参・提出』と評価された児童が120名(34.9%)、『ほとんど持参・提出』と評価された児童が112名(32.6%)、『時々忘れる』と評価された児童が89名(25.9%)、『ほとんど忘れる』と評価された児童が14名(4.1%)、『常に忘れる』と評価された児童が5名(1.5%)であった。一方、重複ありの児童の場合、『常に持参・提出』と評価された児童が37名(31.4%)、『ほとんど持参・提出』と評価された児童が30名(25.4%)、『時々忘れる』と評価された児童が32名(27.1%)、『ほとんど忘れる』と評価された児童が13名(11.0%)、『常に忘れる』と評価された児童が0名であった。

・指示に対する遂行能力

教師からの指示に対してどの程度課題を遂行することに困難を示すかについて、『ない』から『多い』までの5段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『ない』と評価された児童が32名(9.3%)、『ほとんどない』と評価された児童が92名(26.7%)、『時々ある』と評価された児童が145名(42.2%)、『やや多い』と評価された児童が47名(13.7%)、『多い』と評価された児童が24名(7.0%)であった。一方、重複ありの児童の場合、『ない』と評価された児童が1名(0.8%)、『ほとんどない』と評価された児童が16名(13.6%)、『時々ある』と評価された児童が44名(37.3%)、『やや多い』と評価された児童が36名(30.5%)、『多い』と評価された児童が17名(14.4%)であった。

・学校生活

学校生活に関する上記3項目において、同年齢の健聴児と比較して、おおむね良好である(9点以上)と評価された児童は334名(重複なしの児童274名、重複ありの児童60名)、課題がある(8点以下)と評価された児童は115名(重複なしの児童65名、重複ありの児童50名)であ

った（図 3-14、図 3-15）。このうち重複なしの児童に関する回答が 70 件、重複ありの児童に関する回答が 53 件であった。

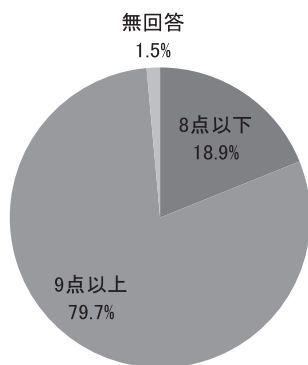


図 3-14 学校生活全般の評価（重複なし児）

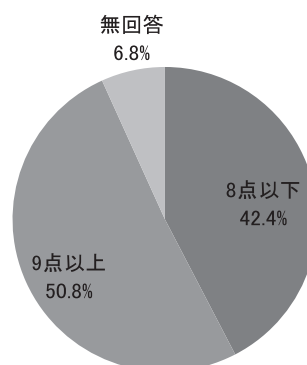


図 3-15 学校生活全般の評価（重複あり児）

重複なしの児童に関する回答では、生活リズムが崩れやすい、あるいは提出物等の忘れ物が多いことなどが挙げられていた。また、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、聞き漏らしが多く、他児の様子から察して行動するなど、言語的な指示が理解できずに適切な行動ができない場合が挙げられていた。

重複ありの児童に関する回答には、“放課後デイサービスを利用し、宿題を忘れないようになったが、持ち物は忘れることが多い”、“家庭と連携し、意識的な生活を心掛けるように取り組んでいる”などの意見が挙げられた。また、低学年の場合には、排せつの自立ができていないことなども挙げられていた。知的障害者や発達障害を併せ有することに起因する重点指導項目があることがうかがわれた。

⑤学校での行動

・そぐわない行動の程度

同年齢の平均的な健聴児童に比べて、学校で場にそぐわない行動や不適切な行動をとることがあるかについて、『ない』から『多い』の 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『ない』と評価された児童が 89 名（25.9%）、『ほとんどない』と評価された児童が 109 名（31.7%）、『時々ある』と評価された児童が 96 名（27.9%）、『やや多い』と評価された児童が 31 名（9.0%）、『多い』と評価された児童が 17 名（4.9%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『ない』と評価された児童が 13 名（11.0%）、『ほとんどない』と評価された児童が 25 名（21.2%）、『時々ある』と評価された児童が 27 名（22.9%）、『やや多い』と評価された児童が 28 名（23.7%）、『多い』と評価された児童が 20 名（16.9%）であった。

・情緒的な課題

同年齢の平均的な健聴児童に比べて、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすることがあるかについて、『ない』から『多い』の 5 段階で評価したところ、重複な

しの児童の場合、『ない』と評価された児童が 58 名（16.9%）、『ほとんどない』と評価された児童が 90 名（26.2%）、『時々ある』と評価された児童が 113 名（32.8%）、『やや多い』と評価された児童が 57 名（16.6%）、『多い』と評価された児童が 22 名（6.4%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『ない』と評価された児童が 3 名（2.5%）、『ほとんどない』と評価された児童が 32 名（27.1%）、『時々ある』と評価された児童が 30 名（25.4%）、『やや多い』と評価された児童が 24 名（20.3%）、『多い』と評価された児童が 25 名（21.2%）であった。

・友人関係

友人関係について、他の子どもたちと良好な関係を維持できているかについて、『非常に良好である』から『良好ではない』までの 5 段階で評価したところ、重複なしの児童の場合、『非常に良好である』と評価された児童は 55 名（16.0%）、『良好である』と評価された児童は 160 名（46.5%）、『ふつう』と評価された児童は 98 名（28.5%）、『あまり良好ではない』と評価された児童は 24 名（7.0%）、『良好ではない』と評価された児童は 3 名（0.9%）であった。一方、重複ありの児童の場合、『非常に良好である』と評価された児童は 7 名（5.9%）、『良好である』と評価された児童は 29 名（24.6%）、『ふつう』と評価された児童は 62 名（52.5%）、『あまり良好ではない』と評価された児童は 14 名（11.9%）、『良好ではない』と評価された児童は 2 名（1.7%）であった。

・学校での行動

学校での行動に関する上記 3 項目において、同年齢の健聴児と比較して、おおむね良好である（10 点以上）と評価された児童は 296 名（重複なしの児童が 244 名、重複ありの児童が 52 名）、課題がある（9 点以下）と評価された児童は 155 名（重複なしの児童が 94 名、重複ありの児童が 61 名）であった（図 3-16、図 3-17）。このうち重複なしの児童に関する回答が 92 件、重複ありの児童に関する回答が 56 件であった。

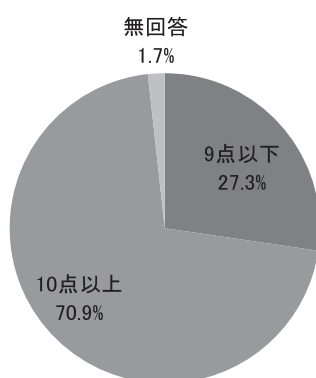


図 3-16 行動面全般の評価（重複なし児）

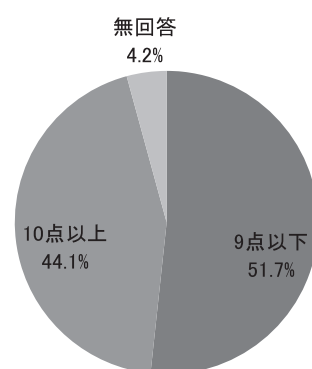


図 3-17 行動面全般の評価（重複あり児）

重複なしの児童に関する回答では、自分本位な行動が多く、他児との関係でトラブルを起こすことが多い様子がうかがわれた。また、障害理解との兼ね合いで、「自分は聞こえている」という

思いの強さから、聞き漏らしがあってもそれを認めないなど、聴覚障害に起因する行動上の不適切さも見受けられた。

重複ありの児童に関する回答には、“突発的なことへの対応が苦手”、“興味があるものを見つけると、衝動的にそこに向かっていくことがある”などの意見が挙げられた。本項で重複する障害の多くが発達障害であることに起因する行動上の不適切さと考えられた。

Ⅱ まとめ

1. 教員の属性について

本調査で対象となった小学部担当の教員については、教員経験の平均が 17.5 年であり、特別支援学校（聴覚障害）での指導経験の平均が 11.1 年であった。教員経験の約 3 分の 2 の期間で特別支援学校（聴覚障害）において指導を行っており、聴覚障害児教育に長く携わっている教員であるといえる。一方で、人工内耳に関する研修会で学びたい内容については、人工内耳の基礎研修会を希望する者が 57% 占めており、聴覚器の解剖生理や人工内耳の仕組みそのもの、さらには日々の使用にあたっての留意点等の、ごく基本的な内容に関する研修会を求めている。そのため、聴覚障害児教育に関する理解は深いものの、人工内耳そのものへの理解は薄いことがうかがえる。

2. 指導を行っている聴覚障害児童について

まず、上記教員が担当している聴覚障害児童の属性について記す。聴覚障害の診断がなされた時期は 2 歳までで過半数を占めており、新生児聴覚スクリーニング検査が普及した影響がうかがわれた。また、人工内耳装用時期については、1 歳代で 16.3%、2 歳代で 26.2%、3 歳代で 17.2%、4 歳代で 10.7%と、ややばらつきがみられた。また、人工内耳手術を実施する前の平均聴力レベルの平均は 100dB 程度であったが、人工内耳手術後の装用時閾値は 35dB～40dB 程度であり、良好な聞こえがなされているといえる。

聴覚障害児自身が普段使用しているコミュニケーションモードについては、音声 が 89%、手話が 82%、指文字が 71%と、トータルコミュニケーションに近い形で使用されていることがうかがえるが、学習時の使用コミュニケーションモードについては、音声 が最も多く（65%）、次いで手話が 25%であった。本調査の対象となった聴覚障害児は、人工内耳を装用し、比較的良好な聞こえがなされているため、特別支援学校（聴覚障害）であっても、手話に頼るのではなく、音声を用いての指導を受けているようであった。

さらに、学校歴については、乳幼相談時期に特別支援学校（聴覚障害）を利用していた児童が 72%、特別支援学校（聴覚障害）幼稚部に通っていた児童が 84%と、これまでに特別支援学校（聴覚障害）を利用していることが分かった。また、今後の進路については、特別支援学校（聴覚障害）中学部への進学を希望する者が 67%おり、高い割合で特別支援学校（聴覚障害）での教育を望んでいることが示された。

3. 聴覚障害児童への指導について

聴覚障害児童への指導について、「聴覚活用」、「言語活動」、「学業成績」、「学習態度」、「コミュニケーション能力」、「学校生活」、「学校での行動」の 7 項目において聞き取りを行ったが、この

うち、「聴覚活用」、「学習態度」、「学校生活」、「学校での行動」の4項目においては、比較的良好であるとの回答が得られた。一方で、「言語活動」、「学業成績」、「コミュニケーション能力」の3項目において課題が指摘された。

まず、「言語活動」において、「文法」、「文章理解」、「作文」、「文章構成」の下位項目いずれも課題が指摘されていた。聴覚活用ができていないことで、聞こえそのものの課題は少ないが、語彙や文法の力を十分に向上できていないようであった。

次に、「学業成績」については、同年齢の健聴児と比べて学習上の遅れがみられることが指摘されていた。これは、「言語活動」の項目でも指摘されていたように、語彙力の低さや文法の力が弱いことで、国語科の学習が困難になるほか、算数の文章題、理科や社会の教科書の読解にも困難があることが挙げられた。

最後に、「コミュニケーション能力」については、コミュニケーション能力が低く、その理由として語彙力の低さや聞き手にとってわかりやすい話し方が身についていないことが挙げられていた。指導上の課題に関する自由記述の中でも、コミュニケーションに関する項目が最も多く挙げられていた。同時に、聴覚活用ができることによって、かえって話者の方に注目をしない、聞き漏らしをしたことに気づけないなど、傾聴態度が身についていないことも挙げられており、これらがコミュニケーション能力の低さに関連しているといえる。

4. 今後の課題

本調査の対象となった聴覚障害児については、人工内耳を装用したことで、これまでの補聴器等装用児に比して聞こえの状態が改善していることがうかがわれた。一方で、これまでの聴覚障害教育において重要視されてきた、言語力や思考力の向上については多くの課題が残されており、人工内耳装用児に対しても丁寧な指導が必要であることが示唆された。

さらに、これまでの聴覚障害児教育においてはごく一般的に養われてきた能力として、傾聴態度が挙げられるが、本調査の対象となった人工内耳装用児については、聞こえが良いためにかえって障害受容が十分にできておらず、結果として傾聴態度の育成もままならない様子がうかがわれた。

なお、本調査では「重複あり」の児童についても回答を得ているが、重複する障害種によって実態やニーズが大きく異なるため、今後、重複する障害種を分類したうえで、より詳細な実態説明が求められる。